



最新のIT技術で 脳の自己修復力をサポート

端末システムやビジネスアプリの開発などに取り組むシステムエンジニア集団。高次脳機能障がい者向け支援ツール「あらた」で医療分野に進出し、リハビリと組み合わせた総合医療サービス事業に取り組む。

株式会社インサイトは、ソフトウェアやシステムの開発・運用・販売を手がけるITシステムサービス会社だ。代表取締役社長の九鬼隆章氏が大手電機メーカーを退職後、大阪に帰郷して1999年に設立した。

事業内容は他社から依頼される受託開発と、自社開発ソフトの2つ。製造業の工場で生産をコントロールするビジネスアプリケーションや、銀行ATM（現金自動預け払い機）など端末システムの制御が中心。売り上げの大半がこれら受託開発だが、「将来は受託が減少する分野も多い」と九鬼社長は予想している。

将来を見据えて、今後力を入れていくのが自社開発のソリューションソフトだ。計測機器など現場で発生している状況を素早く入力できて、簡単・正確に解析するソフト「収集名人」や、高次脳機能障がい者向け

Corporate Profile

代表取締役社長 九鬼隆章
 本社 大阪府豊中市新千里西町1-2-14
 設立 1999年12月
 売上高 3億円(2015年9月期)
 従業員 32人(2016年11月現在)
<http://www.insite-corp.co.jp/>



本社がある大阪府豊中市の三井住友海上千里ビル

の生活支援ソフト「あらた」を主力商品にしている。どちらも月決めの定額で利用できるタブレット用アプリ。とりわけ、超高齢社会の到来を踏まえ、同社が注力しているのが「あらた」だ。

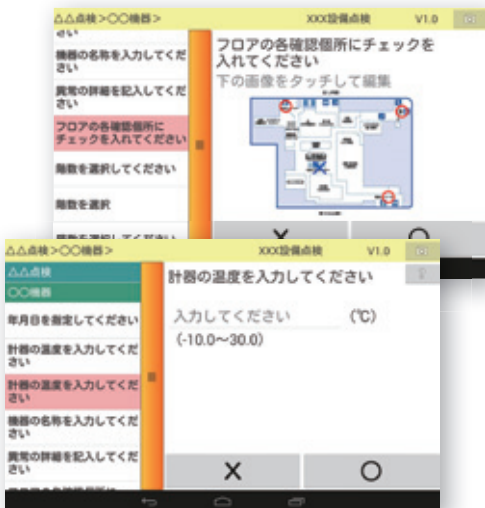
高次脳機能障がいとは、ケガや脳卒中などで起きる脳の損傷によって認知機能に障がいが出る病気。記憶が飛ぶ、いつもやっていた行動のやり方が分からなくなるなどの様々な症状が出て、日常生活が困難になる。2012年に九鬼社長の母親がこの病気になることが、「あらた」の開発のきっかけだった。介護する妻



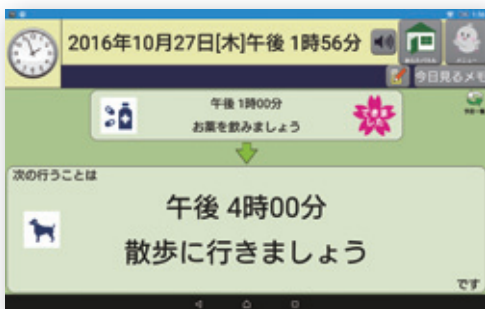
本社の一角に開発部隊が席を並べる。ビジネスアプリやシステム制御ソフトウェアの受託開発で業績を伸ばしてきた



「患者がこのアプリを使うことで、新たな自分を見つけてほしいという願いから『あらた』と名付けた」と話す九鬼隆章代表取締役社長



同社では、「あらた」以外にも数々のアプリ開発の実績を持つ。設備機器などに発生している状況を収集し、効率的に解析するアプリ「収集名人」は、建築会社や点検会社で活用されている



「あらた」は、次にどのような行動を取ればいいのかを画面に大きく表示して教えてくれる

も苦勞しているのを見た九鬼社長は「何とかしたい」と決意。「脳の一部分が損傷しても、他の部分が別ルートでそれを修復することが医学の発達によって分かった。『あらた』はその働きをサポートするツール」と九鬼社長は言う。

具体的には、アラーム機能やスケジュール管理機能によって利用者に「次に行くこと」を分かりやすく教える。例えば病院へ行く時間になるとメイン画面にキャラクターが登場し、メロディーと音声で知らせる。「家族が度々『病院に行く時間よ』と促すと本人もうるさがつて衝突が起きがちだが、第三者からの促しは素

直に聞けることが多い」と九鬼社長。人間の声を録音することも可能で、孫の声を使う年配者が多いという。

脳の自己修復力を支援する総合医療サービスに

高次脳機能障がいのある作業療法専門家である、神戸大学大学院の種村留美教授が「あらた」を監修している。日本中央競馬会の元騎手で、落馬による脳挫傷などが原因の高次脳機能障がいになった常石勝義氏は、種村教授の勧めで「あらた」を使い始め、障がいを乗り越えることができた。14年の学会で報告している。

同年のITヘルスケア学会第8回年次学術大会では製品賞を受賞するなど、医療関係者から高く評価されている。

現在、岡山県の川崎医療福祉大学と共同で認知症のリハビリシステムを開発している。「あらた」と他の認知トレーニングツールを連携させた総合医療サービスとしての形を整えてから、本格的に事業展開していく考えだ。

認知症予備群や発達障がいの子どもなどを対象にした医療系ソフトの開発も進めたい意向。「脳の自己修復力を支援する」ことを柱に置いて、医療関連事業の拡大を図る。



「あらた」は、予定や出来事を忘れないように、スケジューラーや日記機能も持つ

兵庫県宝塚市の作業所「わかば」では神戸大学大学院の種村留美教授が「あらた」を使った高次脳機能障がいのリハビリを実施。利用者の声を開発・改良に生かしている